6,666きぐひ
かわら版

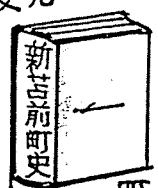
発行
苫前町郷土史研究会
苫前町郷土資料館 ㉓
平成27年6月

733年ぶり 新苫前町史刊行される

2010年から編さん作業を進めてきた「新苫前町史」が完成した。

1932年刊行の「苫前町史」以来33年経った2冊目。

執筆は苫前町出身で、元北海道開拓記念館学芸部長の関秀志さんを中心に、町内の役場職員、郷土史研究会員、農業や商工関係の町民など18人が編さん作業にあたってきた。



80年までの歴史を収録した前苫前町史を引き継ぎ、81年～2012年までの出来事をまとめた、約30年間の町のあゆみが細かく紹介されており、関係者は「町の歴史を後世に伝える新たな基礎資料となる」と喜んでいる。

購入ご希望の方は役場総務政課へ（1冊7,000円）

忠魂碑に建立の由来板取付け

昨年十月、苫前神社境内にある戦没者の忠魂碑に、建立の由来板が苫前町遺族会（森晃一会長、会員六十七名）により取付けられた。（縦六十センチ、横九十一センチ）で、一目でわかるように台座の正面に取付けられている。

―忠魂碑建立由来―碑文―

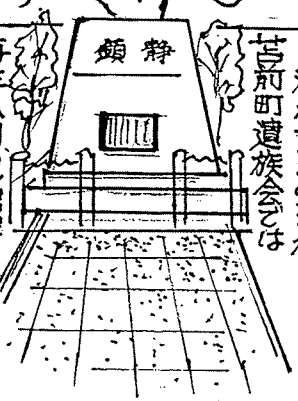
明治三十七、三十八年の日露戦争に出征、戦争終結と共に帰郷した戸澤喜三郎氏は、苫前村在郷軍人会会長となり日清、日露戦争で祖国に殉じた英霊を讃えるべく、明治四十二年に分会員と相諮り、忠霊碑の建立を発意。

素材の石は同年三月、字岩見（古丹別原野十四線）の畑より分会員の労力奉仕により搬出した。

碑文は、第七師団長、陸軍大将を歴任した大迫尚敏氏の揮毫による。

彫刻は力量在住の石工により同年八月、台座と共に完成したものである。

平成二十六年十月吉日
苫前町遺族会



―時は流れても―

ことしは戦後七十年、忠魂碑には苫前町（村）から出征し、異国で散った戦死者（日清、日露の戦死者も含む）二百二柱を祀っている。

あの忘れない戦争も時代と共に薄れつつあるが、苫前町遺族会では毎年八月、忠魂碑前で招魂祭を営んでいる。

―戦争は決して起こしてはならない―

七月はお祭りシーズン

この季節が到来すると大人も子供も何となくうきうきする。その中に昔から伝わるあの勇壮な神輿の練り歩きが祭りの雰囲気を盛り上げる。

また神輿には、五穀豊穣、大漁祈願、家内安全、疫病退散、災厄など人々のための願いや祈りが込められております。

―一会―

郷土資料館から

～チセで遊んではいけないよ～

昨年、小学生と思われる子供達が、古代の里のアイヌのチセ（家）の中で遊んでいるのが見かけられた。苫前町の貴重な文化施設なので遊ばないように保護者から指導してください。

また、お菓子などのビニール袋や紙片も多く捨てられておりましたので、この点もよろしくお願いいたします。トイレや水も大切に使ってください。

いい季節になりました

長く厳しい冬がようやく過ぎ苫前町にも輝く季節をむかえました。

生命あるもの、特に人間は春夏秋冬にたくましく適応して生きていく力をそなえております。

大地の恵みを育てている農家の皆さん、海の幸を届けてくれる漁師の皆さん、そして朝早くから一生懸命働く町民の皆さん、郷士史研究会は皆さんに感謝しつついつまでもご健康でありますよう願っております

＝街並地図の活用を＝

郷土史研究会が作製した昭和30年の苫前と古丹別の街並地図を同窓会やクラス会、また、遠く離れて行った親戚や友人などへ、活用したり、送ってあげてください。（公民館でコピー有料）

郷土史研究会 町に三点要望決める

苫前町郷土史研究会の総会が六月一日、午後四時から「古代の里」のアイヌのチセ（家）で開催された。

新会員を含め十三人出席し、今年度の事業計画と予算を決めたあと放談会に移り、いままでの反省と今後の事業実施計画について大いに語り合った。

その中で、町に対して次の要望事項が決められた。

一、補助金の増額（二十七年度・一万八千円）

一、三毛別羆事件復元地の整備（トイレ、飲料水、休憩所、復元地全体の見直等）

一、三浦綾子文学記念碑建立

学社融合事業では協力指導員（二名以上）と決めまた役員改選では会長のみ改選され会長には九重の森晃一さんが選出された。

"あなたも郷土史研究会に入ってみませんか"

―アイヌのチセで放談会―